

No.	Langua	Authors	Title	Journal	Year	Volume	Pages	Abstract
12	英語	TakahashiEiko, YamakadoMinoru, KawaguchiTakeshi	高血圧治療中のライフスタイル改善の重要性(Importance of Lifestyle Modifications During the Treatment of Hypertension)	人間ドック	2006	20	15-19	治療中の高血圧症例1064例(男785例,女279例,平均59.1歳)を対象に横断研究を行い,コントロール不良の高血圧に関連する危険因子の抽出を行った。調整オッズ比及び95%信頼区間を得るため,肥満及びハットの生活スタイルを多変量ロジスティック回帰モデルに用いた。591例(55.5%)が目標血圧値に到達できておらず,多変量解析で,血圧コントロール不良と肥満,不規則な食事時間,毎日の飲酒との関連が示された。肥満のオッズ比はBMI 23kg/m <sup>2</sup> のカットオフ値で有意に増加した。血圧コントロール不良例では,体重減少,アルコール摂取減量,規則正しい食事時間など生活習慣の改善を行った後,降圧剤の至適投与量や追加薬剤について考慮すべきである。
25	日本語	若林 一郎, 荒木 慶彦	日本人女性勤労者における年齢別の飲酒と動脈硬化リスク要因との関連性	日本老年医学会雑誌	2006	43	525-530	定期健診を受診した20~69歳の女性53911人を対象に,1日あたりの平均飲酒量により非飲酒群,少量飲酒群(エタノール換算30g未満),多量飲酒群(30g以上)に分け,飲酒と動脈硬化リスク要因との関係を年齢別に検討した。1)BMIは加齢に伴い増加し,50代まで非飲酒群に比し少量飲酒群で有意に低かった。2)血圧は加齢に伴い上昇し,収縮期血圧は40~50代の多量飲酒群で,拡張期血圧は50代までの多量飲酒群で他2群に比し有意に高かった(60代も同傾向)。3)総コレステロールは加齢に伴い増加し,50代までは飲酒群で非飲酒群に比し低い傾向,60代では高い傾向を示した。HDLコレステロールは加齢に伴い減少し,全年代で飲酒量増加に伴い高値を示した。4)動脈硬化指数は加齢に伴い上昇し,全年代で飲酒量増加に伴い低値を示した。以上,高年女性では,飲酒の動脈硬化進展予防のメリットが少なく,デメリットの方が多くなると考えられた。
50	日本語	坂本 静男	【メタボリックシンドロームと運動】メタボリックシンドロームと生活習慣	体育の科学	2006	56	550-553	
51	日本語	佐藤 真治	【メタボリックシンドロームと運動】生活習慣病と運動	体育の科学	2006	56	542-549	
52	日本語	小沼 富男	【メタボリックシンドロームと運動】糖尿病・耐糖能異常と運動・食事	体育の科学	2006	56	821-525	
55	日本語	横山 顕	【アルコールの健康への影響】アルコール代謝関連酵素と発がんとの関係	臨床栄養	2006	109	32-35	

No.	Langual	Authors	Title	Journal	Year	Volume	Pages	Abstract
98	日本語	玉置克己, 菅伊知郎, 岩崎雄樹, 安武正弘	冠状動脈インターベンション若年症例の検討	東京医師会雑誌	2006	59	432-437	経皮的冠状動脈インターベンション(PCI)を施行した183例を対象とし、年齢階層別に疾患、危険因子などを比較検討した。複数回PCIを受けていることが多く、実際の患者数は140例であった。50歳未満の症例は8例、80歳以上の高齢者は28例であった。全ての年齢層で男性の数が女性を上回った。50歳未満では女性は一人も居なかった。全ての年齢層でACSが最も多かった。危険因子では、90歳以上を除いて、年齢が上昇するに従って、喫煙者の割合が減少した。若年者ほど禁煙による冠状動脈疾患予防効果が期待できることが示唆された。高脂血症も喫煙ほどではないが、若年者ほど割合が高い傾向にあった。糖尿病は喫煙、高脂血症と違った傾向を示した。高血圧は、糖尿病と対照的な傾向を示した。
100	日本語	上島弘嗣	動脈硬化 Update 2005 わが国の循環器疾患の動向とその危険因子との関連	Therapeutic Research	2006	27	35-42	
106	英語	Ishizaka Yuko, Ishizaka Nobukazu, Takahashi Eiko, Toda Ei-ichi, Hashimoto Hideki, Nagai Ryozo, Yamakado Minoru	健康診断受診者における代謝症候群の有病率およびその危険因子(The Prevalence of Metabolic Syndrome and Each Risk Factor in Individuals Undergoing Health Screening)	人間ドック	2005	19	33-38	日本人における代謝症候群の有病率を調べる目的で、健康診断受診者の横断面データを解析した。代謝症候群の診断には米国高脂血症治療ガイドラインの修正版診断基準を用いた。すなわち高脂満度指数、高血圧、高血清中性脂肪、低血清HDLコレステロール、高血糖である。対象49375名(男性32489名、女性16886名、平均年齢52.2±10.2歳)における代謝症候群の有病率は10%、うち男性13.1%、女性4.1%であった。有病率は、男性においては50歳で横ばい状態となったが、女性では年齢上昇とともに増加した。HOMA-IRは、両性とも各被験者に認められた。危険因子数の増加とともに上昇した。年齢、血清コレステロール値、喫煙歴について修正した有病率は男性が女性の約3倍高かった。代謝症候群の有病率は人種間で異なる事が既報で知られているが、本結果では日本人における有病率は男性が女性より高い事が認められた。
136	日本語	永沢光, 和田学, 寒河江理生, 川並 森, 栗田啓司, 加藤文夫	アルコール摂取と頸部動脈硬化、無症候性脳梗塞との関連 Takahata Study	東北脳血管障害研究会	5	5		同一年齢のみの2集団に対し、遺伝子多型と頸部動脈硬化、無症候性脳梗塞の関連を明らかにするためのpopulation-based studyを行った。検査時61歳と72歳の652例を対象とした。動脈硬化の危険因子や頸部超音波MRIの平均をALDH2の3つのgenotypeごとに比較すると、アルコールの摂取状況以外の因子は遺伝子のタイプによる有意な違いは認めなかった。ALDH2*1/*1という活性型酵素をコードするタイプには、過量飲酒者の割合が高く、*2/*2という非活性型の遺伝子では全員がnever drinkerであった。PS上昇に対する影響力を表す標準化係数は、過量飲酒、喫煙、収縮期血圧の順であった。男性におけるALDH2*1/*1は、多発性無症候性脳梗塞の独立した危険因子で、頸部血管動脈硬化は飲酒状況と密接な関係を持ち、過量飲酒は有意な危険因子となったことが示唆された。
144	日本語	石見佳子	【食と生活習慣病】 骨粗鬆症と食習慣	からの科学	2006	249	76-82	
145	日本語	古野純典	【食と生活習慣病】 胃がん、大腸がん、食習慣	からの科学	2006	249	60-67	

No.	Language	Authors	Title	Journal	Year	Volume	Pages	Abstract
146	日本語	岩崎基, 津金昌一郎	【食と生活習慣病】 肺がん, 乳がん, 食習慣	からの科学	2006	249	53-58	
166	日本語	卜藏, 浩和, 小林祥泰	【心筋梗塞と脳梗塞の対比 update】 脳梗塞の危険因子	循環器科	2006	59	431-434	
167	日本語	高野仁司, 清野精徳	【心筋梗塞と脳梗塞の対比 update】 冠動脈疾患の危険因子	循環器科	2006	59	424-430	
180	日本語	白京訓, 松田圭二, 渋谷肇, 青柳賢子, 中村圭介, 端山軍, 山田英樹, 大見琢磨, 野澤慶次郎, 味村俊樹, 渡邊聡明, 冲永功大	【生活習慣病としての消化器疾患 生活習慣の改善で予防は可能か】 生活習慣と大腸癌	成人病と生活習慣病	2006	36	675-680	現在日本人の死亡原因の第1位にあげられる悪性新生物(癌)は、他の先進諸国と同様にその死亡率は年々増加傾向を示している。なかでも世界からみて長寿国の日本では、さらなる高齢化社会の進行、生活習慣の欧米化に伴い、男女ともに胃癌が減少し、従来から欧米型といわれてきた大腸癌や肺癌、乳癌、前立腺癌が増えてきている。生活習慣病に含まれる大腸癌は、環境因子に寄与するところが大きく、死亡率を下げるうえで一次予防および二次予防が今後さらに重要となってくる。とくに一次予防(健康増進と発病予防)についてかかわりの深い食習慣と大腸癌との関係は、近年の疫学研究や動物実験の結果などから、今までの知見とはかなり異なってきた。また、WHOでは予防因子に身体活動(結腸癌のみ)、危険因子に肥満、過体重を確実に寄与する因子として取り上げている。臨床の現場にも、今後の新たな知見に留意し診療にあたることが重要と考える(著者抄録)
181	日本語	長尾玄, 森俊幸, 杉山政則, 跡見裕	【生活習慣病としての消化器疾患 生活習慣の改善で予防は可能か】 生活習慣と肺癌	成人病と生活習慣病	2006	36	660-663	肺癌の発生には、遺伝的因子と環境因子が関与しているが、遺伝子異常で説明できる肺癌は全体の10%以下とされており、大部分は環境因子によるものとされている。肺癌の危険因子の候補として、素因、糖尿病、慢性肺炎などの疾患、食事、喫煙、種々の化学物質、放射線などがあげられているが、これまでに危険因子として認められているのは、加齢と喫煙だけである。喫煙に関しては1960年代後半から開始されたcohort studyにおいて、現在喫煙者において男性で1.5倍、女性では1.6倍、危険度が非喫煙者に比べ高いことが報告された。また、禁煙の効果についてもこれまでにいくつもの報告がなされており、禁煙期間と肺癌の危険度の相関を思いだした。その他に飲酒や食事内容、糖尿病、慢性肺炎などの疾患群も危険因子として以前より注目されているが、いまさらさらさまざまな報告があり一定の見解は得られていない。環境因子、遺伝的因子による肺癌発症高危険群の設定、それに伴う検査の確立が今後の課題と考えられる(著者抄録)

No.	Language	Authors	Title	Journal	Year	Volume	Pages	Abstract
182	日本語	平田公一, 秋月恵美, 木村康利, 大島秀紀, 山口浩司, 桂巻正, 坂内文男, 森満	【生活習慣病としての消化器疾患 生活習慣の改善で予防は可能か】 生活習慣と胆嚢癌・胆管癌	成人病と生活習慣病	2006	36	650-655	胆嚢癌と胆管癌を分けて分析した疫学的な研究報告は極めて少ない。一方、これら癌の本邦での発癌率は高く、それらによる死亡例数が多いことから、予防医学的見地からもより精密な疫学的研究の発表が望まれるところである。現状で胆嚢癌や胆管癌の高リスク因子としては、胆石症、胆嚢炎、膵胆管合流異常症など当該部局所疾患とともに腸チフス、回虫症あるいは炎症性腸疾患などの疾病が指摘されている。生活習慣としての高リスク因子としては、肥満や排便状況、とくに便秘症、そして食物としては揚げ物(フライ)や脂性・油性食品(チーズ、バターなど)、低リスク因子としては鮮魚、煮豆類などが抽出されている。予防対策としては、指摘されている高リスク因子に注目して高リスク群を設け、それらの人々に対するスクリーニング法の確立や日常生活習慣上の注意点を強く勧告していくことがあげられよう(著者抄録)
183	日本語	小橋春彦, 白鳥康史	【生活習慣病としての消化器疾患 生活習慣の改善で予防は可能か】 生活習慣とアルコール性肝障害	成人病と生活習慣病	2006	36	631-636	アルコール性肝障害は常習飲酒に起因する健康障害であり脂肪肝・肝炎・肝硬変などさまざまな病型を呈する。近年、アルコール消費量の増加とともにアルコール性肝障害も増加傾向にあり、なかでも女性、若年飲酒者の増加が問題となっている。わが国では、ウイルス性肝炎との区別が困難な場合があり、文部省総合研究(A)高田班診断基準(案)(1991年)ではアルコール性、アルコール+ウイルス性、その他に分類し、飲酒の程度、 $\gamma$ -glutamyl transpeptidase( $\gamma$ -GTP)上昇、aspartate aminotransferase(AST)優位のトランスアミンアーゼ上昇、glutamate dehydrogenase(GDH)とornithine carbamoyltransferase(OCT)の上昇、禁酒によるこれら酵素の改善などから鑑別診断する。アルコール性肝炎は通常入院断酒により軽快することが多いが、一部には断酒しても肝腫大、肝不全が進行し多くが死に至る病型があり、重症型アルコール性肝炎として分類されている。アルコール性肝障害の発生機序としてアセトアルデヒドによる直接障害、代謝過程に伴う酸化ストレス、エンドトキシン血症が重要である。宿主側の危険因子として女性、代謝酵素の遺伝的多型性、アルコール依存症が関与している。アルコール性肝障害の根本的かつもつとも有効な治療は持続的な断酒であり、医師、家族、コメディカルの協力による断酒指導が必要である。また、発症予防には飲酒習慣に対する教育など、社会面からの取り組みが必要である(著者抄録)

No.	Langua	Authors	Title	Journal	Year	Volume	Pages	Abstract
184	日本語	熊谷一秀	【生活習慣病としての消化器疾患 生活習慣の改善で予防は可能か】 生活習慣と胃癌	成人病と生活習慣病	2006	36	626-630	胃癌は他の癌腫と同様環境因子、ストレス、生活習慣および遺伝的素因などが複雑に絡み合い発生するものと考えられている。特に生活習慣と胃癌は多くの疫学的研究、基礎的研究から密接な関係があることが認められている。食事に関しては食塩の過剰摂取、高エネルギー食は胃癌発生にほぼ関連しない因子とされ、疫学データ基礎的研究データでも多くの証拠が報告されている。高炭水化物食や焼き魚・焼肉などの焦げの部分は危険因子としての疫学調査が行われたが「可能性のある程度にとどまっている。喫煙は多くの癌腫の危険因子とされ、特に肺癌との因果関係が強く支持されているが、胃癌に関しては危険因子ではあるが肺癌と比べ重みは小さいようである。H.pylori感染はWHOの報告でも胃癌発生の確かな要因とされ、本邦における疫学研究、基礎的研究でも裏付けが進んでいる。一方、胃癌発生予防因子として野菜果物摂取は疫学的に発癌抑制因子として確実とされ、抗酸化ビタミン類もほぼ確実から可能性ありとされている(著者抄録)
185	日本語	加藤順子、永原章仁、佐藤信敏	【生活習慣病としての消化器疾患 生活習慣の改善で予防は可能か】 生活習慣と食道癌	成人病と生活習慣病	2006	36	615-619	食道癌は多くの危険因子を有しており、その高い致死率から危険因子を予防する方法が望まれている。危険因子の代表として、飲酒、喫煙がもつとも知られており、それらは密接にかかわっており、相乗効果により危険度は増加するといわれている。飲酒により食道癌を発症する要因として、2型アセトアルデヒド脱分解酵素(ALDH2)欠損がいわれている。特にヘテロ欠損型に食道癌が多い。ALDH欠損者と判定する方法として、遺伝子解析に匹敵する簡易フラッシング質問表がある。また、頭頸部癌は食道癌を重複する頻度が高く、頭頸部癌患者は食道癌の高リスク群として取り扱う必要がある。食道癌は、飲酒、喫煙、アルコール依存症、野菜・果物摂取不足、食道刺激性食物・飲料(極端に熱いものなど)の常用など生活習慣と密接な関係があり、予防療法として生活習慣の改善に対する今後の取り組みが望まれる(著者抄録)
186	日本語	辻聖吾、西田勉、辻井正彦	【生活習慣病としての消化器疾患 生活習慣の改善で予防は可能か】 生活習慣病としての胃食道逆流症(GERD)	成人病と生活習慣病	2006	36	604-610	GERDはその発症に生活習慣が寄与するばかりでなく、肥満、2型糖尿病や骨粗鬆症など、他の生活習慣病に合併したり、その治療に併発することのある病態である。特に肥満者におけるGERDや、食道癌のリスク・女性におけるホルモン補充療法とGERD、高齢女性における骨粗鬆症・椎骨圧迫骨折(円背)とGERD、4人に1人がGERDを合併する2型糖尿病の問題、虚血性心疾患とGERDに伴う胸部痛の鑑別、睡眠時無呼吸症における胃食道逆流現象、などが現在の課題である。GERDの有病率は高く、生活習慣の改善による予防は確実性に欠けるとしても適切である。ただし、GERDは患者QOLを著しく低下させるため、病状が明らかな場合はプロトンポンプ阻害薬などを用いた積極的な介入も考慮すべきである(著者抄録)

No.	Langual	Authors	Title	Journal	Year	Volume	Pages	Abstract
187	日本語	富永祐民	【生活習慣病としての消化器疾患 生活習慣の改善で予防は可能か】日本人の消化器癌の疫学と予防	成人病と生活習慣病	2006	36	600-603	日本人の消化器癌(食道癌,胃癌,大腸癌,肝臓癌,胆道癌,膵臓癌)は全癌死亡の55.0%を占めており,全癌罹患の54.2%を占めている。わが国において消化器癌全体の年齢調整死亡率は減少傾向を示しているが,大腸癌(特に結腸癌),胆道癌,膵臓癌は増加傾向を示している。多くの疫学研究から,消化器癌の危険因子・予防因子が明らかにされており,生活習慣が消化器癌の発生に密接に関連していることが明らかになっている。消化器癌の主な危険因子としては,喫煙,多量飲酒,塩辛い食物,低身体活動,コーヒーなどがあげられている。生活では新鮮野菜,果物,身体活動,コーヒーなどがあげられている。生活習慣の消化器癌に対する寄与度は約30%と推計されており,生活習慣の改善により約20%の消化器癌の予防が可能であると推計されている(著者抄録)
1	日本語	河野宏明	【心筋梗塞における性差】急性心筋梗塞危険因子の性差	性差と医療	2006	3	947-953	
14	英語	KosugeKeichiro, SasakiHideo, IkarashiTomoo, ToyabeShinichi, AkazawaKohei, KobayashiChiaki, AbeEri, SuzukiAkiko, Saitohirofumi, EguchiShoji, OtsukaHideaki, AizawaYoshifusa	重症冠動脈疾患のリスク因子 冠動脈バイパス移植術を受けた患者の症例対照研究(Risk Factors for Severe Coronary Artery Disease: A Case-Control Study of Patients Who Have Undergone Coronary Artery Bypass Grafting)	Journal of Atherosclerosis	2006	13	62-67	冠動脈疾患(CAD)のリスク因子を調査するために,冠動脈バイパス移植術(CABG)を受けた患者を対象に症例対照研究を実施し臨床パラメータを分析した。2001~2002年にCABG手術を受けた患者88例と,こばり健診センター登録者の中から無作為に抽出した年齢・性別適合対照群と比較した。対比較にはワイルコクソンの符号付き検定とマクネマの検定を用いた。CABGの有意なリスク因子を特定するため,多変量ロジスティック回帰分析を実施した。患者および対照群では,HDL-C,HbA1c,プリンマン指数(BI),体格指数(BMI),最大血圧(SBP)において有意差がみられた。異常なBMI,HbA1cおよびHDL-C,ならびに高BI値を示した被検者のうち,CABGを受けた患者は,対照群に比べ有意に高比率を占めていた。多変量ロジスティック回帰分析は,CABGを必要とする有意なリスク因子として高HbA1c値,低HDL-C値,高BI値を示した。本誌では,HDL-C,HbA1c,BI,BMI,SBPはCADリスクの有意な指標であることを示した
32	英語	YinRuixing, YaoLimei, ChenYuming, YangDezhai, LinWeixiong, LiMuyan, HeFengping, WuJinzheng, YeGuangqing, NongZhenbiao	Guangxi Hei Yi Zhuang族と Han族集団における高血圧の頻度,自覚,治療,コントロール,危険因子(Prevalence, Awareness, Treatment, Control and Risk Factors of Hypertension in the Guangxi Hei Yi Zhuang and Han Populations)	Hypertension Research	2006	29	423-432	Hei Yi Zhuang部族1166名(平均44歳)とHan族1018名(平均43歳)を対象とし,血圧値,高血圧頻度,高血圧危険因子を比較検討した。その結果,Hei Yi Zhuang部族の高血圧および孤立性収縮期高血圧の頻度は,Han族と比較して有意に高率であり,Hei Yi Zhuang部族の高血圧認識率,治療率,コントロール率は,Han族より有意に低かった。多変量解析にて高血圧の危険因子は総コレステロール,triglycerides,男性,年齢,アルコール摂取,Hei Yi Zhuang族が挙げられた

No.	Language	Authors	Title	Journal	Year	Volume	Pages	Abstract
33	英語	KimSeon Mee, HanJee Hye, ParkHye Soon	韓国人における高比重リポ蛋白コレステロール低値の頻度と関連因子(Prevalence of Low HDL-Cholesterol Levels and Associated Factors Among Koreans)	Circulation Journal	2006	70	820-826	1998年に実施された韓国全国健康及び栄養調査の18歳以上の対象者3283例(男3283,女4617)についての断面調査を行った。米国家基準または国際糖尿病連合基準による高比重リポ蛋白コレステロール(HDL-C)低値の頻度は男で23.8%,女で47.5%であり肥満指数、腹部肥満、喫煙の増加とともに増加し、アルコール消費量増加とともに低下した。男では身体活動度低下、女では脂肪摂取量減少がHDL-C低値と関連した
35	英語	SugimuraKoichiro, SakumaMasahito, ShiratoKunio	日本の肺血栓塞栓症の危険因子と発生率 郵送アンケート調査による症例対照研究の成績(Potential Risk Factors and Incidence of Pulmonary Thromboembolism in Japan: Results From an Overview of Mailed Questionnaires and a Matched Case-Control Study)	Circulation Journal	2006	70	542-547	前向き症例対照研究により2004年度の肺血栓塞栓症(JPTE)の発生数と危険因子を検討した。大学病院および100床以上の病院を対象とした郵送によるアンケート調査で6321通を発送し、1878通の回答を得た。症例対照研究には209症例を対象とした。その結果、PTEの年間推定発生率は32.2人/100万人であり、多変量解析によるPTEの独立危険因子はbody mass index増加、長時間固定、最近の外科手術、癌であった。動脈硬化の危険因子や飲酒は、PET発症と関連していなかった。2004年度の新規PTE患者は4108例であり、2000年度と比較して上昇傾向は認めなかった
37	英語	KawanoHiroaki, SoejimaHirofumi, KojimaSunao, KitagawaAkira, OgawaHisao	日本人急性心筋梗塞患者における危険因子の性差(Sex Differences of Risk Factors for Acute Myocardial Infarction in Japanese Patients)	Circulation Journal	2006	70	513-517	全国の主な医療施設の初回急性心筋梗塞日本患者1925例(28~103歳,男性1353例,女性572例)と年齢,性別を一致させた対照群2279例を対象とし、大規模標準化,患者対照研究を行い、急性心筋梗塞(AMI)の危険因子を検討した。オッズ比と95%信頼区間より高血圧,糖尿病,喫煙,家族歴,高コレステロール血症がAMIの独立危険因子に挙げられたが、肥満は危険因子ではなかった。男性では高血圧,喫煙,糖尿病が、女性では喫煙,糖尿病,高血圧がAMIの独立危険因子であった。高コレステロール血症は男性では危険因子であったが、女性では認めなかった。日本人AMI患者では高血圧,糖尿病,喫煙,家族歴,高コレステロール血症を伴っており、AMI危険因子の重要度は性別により異なることが示唆された
39	英語	MizoueTetsuya, InoueManami, TanakaKeitaro, Tsujiichiro, WakaiKenji, NagataChisato, TsuganeShoichiro, Research Group for the Development, Evaluation of Cancer Prevention Strategies in Japan	喫煙と大腸癌リスク 日本における疫学証拠の系統的レビューをベースにした評価(Tobacco Smoking and Colorectal Cancer Risk: An Evaluation Based on a Systematic Review of Epidemiologic Evidence among the Japanese Population)	Japanese Journal of Cili	2006	36	25-39	MEDLINEで検索したオリジナルデータを用いて、証拠の強さと関連性の重要度を基に国際癌研究機関の評価による生物学的妥当性と共に喫煙と大腸癌リスクの関連性を評価した。6のコホート研究と15の患者対照研究について確認したところ、喫煙と大腸癌との間に大きな不均一性が認められた。1994年以前に発表された患者対照研究の多くは逆相関性を報告した一方で、過去10年の研究では有意な関連性が認められなかった。最近のコホート研究では、喫煙と関連性のある大腸癌リスクの20~40%の非有意な増加を示した。患者対照研究とコホート研究には喫煙と直腸癌との間に弱い強い正の関連性を示すものもあつた。以上から、日本において喫煙は大腸癌、特に直腸癌リスクを増加させる可能性があるかと結論付した。しかし、大腸癌との明らかな関連性を示すための疫学証拠は未だ不十分である

No.	Langau	Authors	Title	Journal	Year	Volume	Pages	Abstract
45	日本語	藤原佐枝子	【骨粗鬆症の予防】栄養危険因子 栄養的因子(カフェイン, アルコール, 喫煙)	THE BONE	2006	20	465-468	喫煙は骨密度を低下させ、骨密度低下速度を促進し、骨折リスクを高める。喫煙の影響は男性において強い。カフェイン摂取の骨密度への影響は必ずしも一致していないが、骨折に関しては、カフェイン摂取量が約200mg/日(コーヒー2杯/日)以上で骨折リスクは高まる。アルコール摂取については、中等程度以下では骨密度に影響はない、あるいは増加するという報告もある。しかし、40g/日以上(日本酒2合)の飲酒は骨折リスクを高める(著者抄録)
47	日本語	太田博明	【骨粗鬆症の予防】年代別(主に危険因子について) 青壮年期からの予防	THE BONE	2006	20	417-424	骨粗鬆症は生活習慣病であるので、早い時期からの一次予防に勝る対応法はない。したがって本来、骨量的には定常期にある青壮年期に少しでも骨量を増加させ、また少なくとも目減りを防ぐべきである。そのためには日常のライフスタイルにおける運動の励行と適切な栄養素の適量摂取が当然のことながら必須となる。また、エストロゲン分泌の低下をきたすような疾病を回避するとともに、骨量の急激な低下をきたすステロイドを使用せざるを得ない原疾患の回避が最も望まれる(著者抄録)
48	日本語	清野佳紀	【骨粗鬆症の予防】年代別(主に危険因子について) 小児期からの予防	THE BONE	2006	20	411-415	骨粗鬆症の予防は、いかに骨の減少を防ぐかということが一般的に行われているが、ヒトの一生というスパンで骨粗鬆症を予防しようと考えらるならば、骨の成長期にできる限り骨を増やしておくことのほうが効果的である。なぜならば、カルシウム摂取であれ、運動療法であれ、思春期前に負荷をかけたほうが、思春期以降に負荷をかけるよりはるかに効率的に骨が増加することは、多数の研究報告の結果からみても明らかであるからである。本報告では、小児期から骨粗鬆症を予防するためには、いつどのような方法をとればよいかということを中心に、過去の成績をレビューしたい(著者抄録)
58	日本語	大脇淳子	コホート研究による推定栄養素摂取量と肺がん死亡との関連	愛知医科大学医学会雑誌	2005	33	115-126	地域で実施された食物摂取頻度調査のデータを用い、エネルギー、蛋白質、脂質、炭水化物、カロテン、レチノール、ビタミンE、ビタミンCなどの推定栄養素量を算出し、肺癌死亡との関係を検討した。調査の対象は長野県のS市における35歳以上の住民28042名である。その結果、男女共に喫煙習慣と喫煙量に関して肺癌死亡との明らかな関連が認められた。食生活では、各個人を各栄養素別に3分位に分けて肺癌の死亡リスクを検討した結果、男性はエネルギーの摂取量が増加すると肺癌死亡リスクが上昇した。また、レチノール摂取量が少ないと肺癌死亡リスクが上昇した。女性では、蛋白質、脂質の摂取量が多いと肺癌死亡リスクが上昇し、炭水化物の摂取量が少ないと肺癌死亡リスクが上昇した。
89	日本語	栗石聰、片岡宏介	【これで大丈夫患者さんへの情報発信】歯周病と全身疾患】生活習慣病と歯周病 口の中は、危険がいっぱい”リスクファクターとしての喫煙	日本歯科評論	2006	別冊2006	137-144	



No.	Langaua	Authors	Title	Journal	Year	Volume	Pages	Abstract
90	日本語	中垣晴男, 森田一三, 熊谷法子, 福澤歌織, 榊原康人, 井後純子, 各務和宏	【これで大丈夫!患者さんへの情報発信 歯周病と全身疾患】生活習慣病と歯周病 生活習慣病を点数化するとこうなった	日本歯科評論	2006	別冊2006	125-136	
104	英語	MivakiKoichi, SutaniShinya, KikuchiHaruhito, Takeilzumi, MurataMitsuru, WatanabeKiyooki, OmaeKazuyuki	健常日本人男性における高エネルギー摂取とβ3-アドレナリン受容体遺伝子のTrp64Arg多型の相互作用による肥満リスク増加(Increased Risk of Obesity Resulting from the Interaction between High Energy Intake and the Trp64Arg Polymorphism of the β3-adrenergic Receptor Gene in Healthy Japanese Men)	Journal of Epidemiology	2005	15	203-210	β3-アドレナリン受容体遺伝子Trp64Arg多型と環境因子の相互作用についての研究は少ない。エネルギー摂取が同遺伝子多型と肥満との関係に与える影響を検討した。日本の化学工業に従事する健常日本人男性(n=295,年齢46.1±11.5歳,腹囲83.9±9.3cm,体格指数(BMI)23.3±3.3kg/m <sup>2</sup> )を対象に,エネルギー摂取量,蛋白脂肪,および炭水化物(PFC)の割合と毎日の運動に関する自己申告式アンケートによって評価した。多型遺伝子型決定に関しては,書面によるインフォームドコンセントを行った。遺伝子多型の有無によって対象を2群に分けた。2群間の胴囲およびBMIに有意差はなかった。しかし,エネルギー摂取量にのみ肥満率が有意に大きかった。多重ロジスティック回帰分析により,多型の存在が同群における肥満率を有意に高める要因になっていることが証明された。多型の存在単独は肥満リスクを有意に高めないと考えられた。ADRB3遺伝子の相互作用により肥満リスクを増加させると考えられた。ADRB3遺伝子のTrp64Arg多型は他の肥満関連多型と同様,各患者に沿った肥満予防を支持する
111	日本語	PageRoy C	【メインテナンス・ルネッサンス】歯周病の予防管理におけるリスクの評価・定量化 疾病スコアとリスクスコアの活用	歯界展望	2006	108	270-291	
127	英語	TamakoshiAkiko, Yoshimura Takesu mi, Inaba Yutaka, Ito Yoshinori, WatanabeYoshiyuki, FukudaKatsuhiko, IsoHiroyasu, the JACC Study Group	JACC研究のプロファイル (Profile of the JACC Study)	Journal of Epidemiology	2005	15	S4-S8	1988~1990年に日本の45地域において,日本における癌リスクを評価するための文部科学省大規模コホート研究(JACC研究)を実施した。人口統計学情報,既往歴,運動やスポーツへの取り組み,食物摂取頻度,喫煙及び飲酒状況などの疫学的情報について127477名(男54032名,女73445名,40~79歳)の参加者に目録式アンケート調査を行った。又,血中の危険因子を調査するため,37地域におけるスクリーニング参加者(39242名)の血液サンプルを採取した。基礎調査の約5年後に生活様式の変化に関する中間調査を31地域にて行い,51723名にアンケート調査を行った。24地域において,2003年迄に110792名の被験者(男46465名,女64327名)の死亡,移住,及び癌罹患について追跡した。JACC研究は日本における癌予防の有用な証拠を提供する

No.	Langual	Authors	Title	Journal	Year	Volume	Pages	Abstract
135	日本語	西野晶子, 鈴木一 郎, 佐々木啓吾, 宇 都宮昭裕, 鈴木晋 介, 上之原広司, 桜 井秀明	脳血管解離の危険因子に関 する検討	東北脳血管障害研究会	0	0		脳血管解離例における危険因子について検討した。脳血管解離 100例を対象とした。発症様式は脳梗塞60例、くも膜下出血17例、両 者のほぼ同時発症2例、その他22例であった。発症のピークは脳率 中対象群は60歳代であるのに対し、解離群は30歳代から発症が急 増して50歳代にピークが認められ、より若年層に多発した。解離群は 高血圧の罹患率が高い傾向を認めた。解離群では糖尿病罹患率が 高い傾向を認めた。解離群での喫煙率は有意に高かった。病歴上、 軽微な外傷が先行したと考えられる例は12例で認めた。解離群で は100例中9例で、嚢状動脈瘤の合併を認めた。解離群での嚢状動 脈瘤合併率は脳卒中対象群より有意に多く、破裂脳動脈瘤例で の動脈瘤多発率よりは有意に低かった。
151	日本語	細川芳文	【小児科医と禁煙推進】 COPDとたばこ	東京小児科医会報	2006	24	14-18	
188	日本語	佐々木文彦, 神原 博樹	【睡眠時無呼吸症候群 睡眠 医療の確立に向けて】 睡眠 時無呼吸症候群の治療 治療 戦略 生活習慣の改善から始 める	治療学	2006	40	658-661	

NO.	Langual	Authors	Title	Journal	Year	Volume	Pages	Abstract
3	日本語	岡崎和伸, 源野 広和, 森川真悠 子, 能勢博	【新しい健康づくりのための運動基準・指針】運動基準・指針を生かす個別プログラム	体育の科学	2006	56	627-634	
4	日本語	下光輝一	【新しい健康づくりのための運動基準・指針】健康づくりのための運動指針2006 生活習慣病予防のために エクスサイズガイド'2006	体育の科学	2006	56	615-620	
6	日本語	田中茂穂	【新しい健康づくりのための運動基準・指針】生活習慣病予防のための身体活動・運動量	体育の科学	2006	56	601-607	
28	日本語	高木繁治	【脳卒中予防の強化とその最前線 臨床医に求められるもの】脳卒中予防と生活習慣禁煙	Progress in Medicine	2006	26	1191-1194	
29	日本語	佐藤祐造	【脳卒中予防の強化とその最前線 臨床医に求められるもの】脳卒中予防と生活習慣脳卒中危険因子と運動療法	Progress in Medicine	2006	26	1185-1189	
30	日本語	櫻井博文, 岩本 俊彦	【脳卒中予防の強化とその最前線 臨床医に求められるもの】脳卒中予防と生活習慣脳卒中危険因子と食事療法	Progress in Medicine	2006	26	1179-1184	
31	日本語	山崎貴史, 長田 乾	【脳卒中予防の強化とその最前線 臨床医に求められるもの】脳卒中予防と生活習慣脳卒中の危険因子	Progress in Medicine	2006	26	1169-1177	
59	日本語	有吉浩美, 小笠 原正志, 小林敏 生	ヘルスプロモーション理念を取り入れた産業保健活動が生活習慣病危険因子の変化に及ぼす影響	広島大学保健学 ジャーナル	2005	4	74-81	同一社内で異なる産業保健活動を行ってきた男性社員271名を対象に本社に勤務する183名(本社群:平均39.6±9.5歳)と製作部門に勤務する88名(製作群:38.2±9.4歳)とし,7年間の生活習慣及び生活習慣病危険因子の変化を比較検討した.一次予防主体の産業保健活動を行った製作群では7年間に運動が増加傾向にあったが,診察中心の二次予防主体の看護活動を行った本社群では,飲酒者減少のみを認めた.生活習慣病危険因子の増悪の程度はBMI,GPT,γ-GTP,総コレステロール,中性脂肪,HbA1cの6項目で製作群が本社群に比べ有意に小さかった.ヘルスプロモーション理念を取り入れた継続的な職場の環境づくりは生活習慣病危険因子の増悪の軽減に有効であることが示唆された
62	日本語	木村美佳	“いつまでも元気”をめざして高齢期における介護予防のための運動・栄養プログラム TAKE10!	日本未病システム学会 雑誌	2006	11	290-294	

NO.	Language/Authors	Title	Journal	Year	Volume	Pages	Abstract
63	日本語 福島有紀, 安心院康彦, 佐野裕美, 今井昇, 樽田江美, 梶原聡子, 柴田奈央子, 伊真由樹, 野田美由紀, 芹澤正博	再発予防教育を取り入れた軽症脳血栓症急性期クリティカルパス改訂の試み	静岡赤十字病院研究報	2005	25	42-46	我々が独自に作成し,これまで運用してきた軽症脳血栓症のクリティカルパスの適用基準は,症状が軽度で改善も比較的早期であるためアウトカム達成までの期間が短い,また意識も清明なことから,再発予防のための指導に対する理解が可能であるため,治療入院に引き続き再発予防のための教育入院が可能と考えられる。そこで我々は過去に軽症脳血栓症パスを使用した24人の患者について,脳梗塞または動脈硬化のリスクファクターに関連した血圧・年齢・既往歴・喫煙・飲酒などの病歴や血液検査,運動脈工コーなどの検査結果を検討した。そしてその結果をもとに再発予防に重点をおき,教育的要素を取り入れたパスへの改訂を試みた。軽症脳血栓症の急性期管理のために作成したパスを単に症状改善を目的としたものだけでなく,再発予防の教育を取り入れることにより,患者や家族の危険因子に対する認識を高め,退院後の再発予防に期待できると考えられた(著者抄録)
65	日本語 福元耕, 和田高士, 常喜真理, 前田俊彦, 橋本博子, 小田彩	早食いと高血圧,脂質代謝異常,糖代謝異常	日本未病システム学会雑誌	2005	11	73-76	早食いが高血圧,脂質代謝異常,糖代謝異常の危険因子になり得るかを検討した。人間ドックを受診し,高血圧,高脂血症,糖尿病で治療中は除外した男467例,女1814例を対象とした。早食いの有無を「人よりも早く食事を食べおわりですか」という質問と,回答肢「はい,いいえ」の自記式問診票を配布して調査した。収縮期血圧,拡張期血圧,脂質(LDL-C,HDL-C,トリグリセリド),空腹時血糖を測定した。男の早食いの(+ )群は早食いの(- )群と比較して全項目,女では血圧を除く全項目で有意に高値を認めた。早食いは肥満のみならず,生活習慣病である血圧上昇,脂質代謝異常,血糖上昇を引き起こすことが示唆された。早食いを改善することは生活習慣病の予防に重要と考えられた
82	日本語 鈴木比佐, 本多隆文, 山田裕一	石川県における中小企業労働者の健康状態 中小企業で働く労働者の健康保持・増進施策の充実のために	金沢医科大学雑誌	2005	30	83-90	目的:中小企業労働者の健康状態を明らかにし,健康保持・増進に有効な施策を考察する。対象と方法:石川県内の4,592の民間企業に働く64,251(男性41,542,女性22,709)人を男女ごとに業種,企業規模別に区分し,健康診断での異常所見頻度と喫煙,飲酒,身体運動についての非健康な生活習慣の頻度を比較した。年齢構成は間接法を使って標準化した。さらに,年齢,業種の影響を補正した上で,企業規模がそれらの頻度に及ぼす影響を多重Logistic回帰モデルにより分析した。結果:健康診断での脂質異常,肥満,高血圧,肝機能異常,耐糖能異常,腎機能異常,貧血の保有率は,男性でそれぞれ27.3%,27.3%,26.2%,17.0%,9.9%,2.5%,1.0%,女性で17.0%,16.5%,13.6%,3.0%,3.9%,1.3%,8.7%であった。現在喫煙者は男性61.6%,女性16.7%,毎日飲酒者は男性47.2%,女性9.1%,定期的に運動しない者は男性69.4%,女性80.0%であった。男女とも耐糖能異常の有所見者と喫煙する,毎日飲酒する,運動しないという非健康な生活習慣保有者の頻度が,従業員300人未満の中小規模企業で1,000人以上の大企業に比べて有意に高かった。同様の結果は男性の肝機能異常にも見られた。一方,産業医選任義務のある従業員50人以上の企業と,選任義務のない50人未満の企業との間ではそれらの頻度に差は見られなかった。結論:中小規模企業の労働者では耐糖能異常や肝機能異常の頻度が高く生活習慣に問題を有する者が多い,彼らの健康保持・増進のためには,産業医選任義務の拡大よりも,生活習慣改善を目的としたより包括的な産業保健サービス提供が求められる(著者抄録)

No.	Language	Authors	Title	Journal	Year	Volume	Pages	Abstract
88	日本語	森田憲輝, 五十嵐久美子, 佐竹恵治, 藤田久美子, 山瀬智美, 竹村慎二, 田頭正一, 米澤一也, 沖田孝一, 西島宏隆	札幌フィットネススクラブ研究「生活習慣病改善のためフィットネススクラブで運動し効果を科学的にみる研究事業(無作為比較対照試験)」計画と参加者募集方法	心臓リハビリテーション	2006	49-53	9-53	フィットネススクラブでの運動による循環器疾患危険因子の軽減効果を検証するために、その比較対象を一般的に行われている健康診断として生活改善指導とし、運動の上乗せ効果を無作為比較対照試験で比較検討することとを計画した。500人以上の参加者がエントリーすることのできた研究事業、札幌フィットネススクラブ研究(SFCT)の研究デザイン、被験者の募集方法、そして参加者の基礎値について報告した。一定基準の循環器疾患危険因子を有する者を抽出し、その該当者に郵送によって事業案内を送付した。参加希望者は参加同意書に署名後、参加同意者全員が日を替えて健康診断を行い、除け基準該当者は参加辞退とし、参加登録可能な者はくじ引きにより介入群、対照群に割り付けられエントリーが確定した。
94	日本語	渡辺志保	実践ヘルスプロモーションへのヘルスプロモーションで栄養指導を变える! スキーマに働きかける教室の工夫	地域医学	2006	20	604-606	
109	日本語	江口和男, 菊尾七臣	【高血圧 最新の研究動向】臨床編 治療 生活習慣の軌道修正指導 喫煙	日本臨床	2006	64	242-246	
113	日本語	佐藤新, 谷崎弓裕, 柴田武文, 清原裕	生活習慣病リスク予測システム「ひさやま元気予報」久山町研究グループの取り組み	看護	2006	58	088-091	
118	日本語	阿部朱美	運動の行動変容を目指した健康増進事業の量的及び質的評価	日本赤十字広島看護大	2006	6	1-9	H市の健康増進事業の効果を、体力などの身体面、意欲などの心理面、および生活習慣などの行動面から検討することを目的に、当該事業(1クール3か月間)に参加した95名(男性18名,女性77名,平均年齢56.9±8.90歳)へ開始時・修了時の2回アンケート調査を実施するとともに、修了時に71名(うち,女性59名,平均年齢56.7±8.12歳)へグループ・インタビューを実施した。その結果、BMI・体脂肪率・体力測定値・GSES(一般性セルフ・エフィカシー尺度)・健康習慣などの得点は有意に改善されており、肥満予防や体力維持・増進のみならず、セルフ・エフィカシーの向上、健康的な生活習慣の獲得に有効であることが分かった。
196	日本語	半田秀一, 源野広和, 花岡正明, 能勢博	【生活習慣病予防と理学療法戦略】生活習慣病予防のための理学療法領域における実践とその成果	理学療法	2006	23	807-814	
2	日本語	田畑泉	【新しい健康づくりのための運動基準・指針】健康づくりのための運動基準のキーワードと今後の課題	体育の科学	2006	56	635-639	

NO.	Language	Authors	Title	Journal	Year	Volume	Pages	Abstract
5	日本語	宮地元彦	【新しい健康づくりのための運動基準・指針】生活習慣病予防のための体力	体育の科学	2006	56	608-614	
7	日本語	中野滋文	【新しい健康づくりのための運動基準・指針】厚生労働行政における運動施策の新たな展開	体育の科学	2006	56	596-600	
15	英語	KobayashiKoji, KazumaKeiko	日本人男性糖尿病患者における飲酒量推移及びその関連因子(Changes in alcohol consumption and related factors in diabetic Japanese men)	Japan Journal of Nursing	2005	2	95-105	糖尿病患者111名を対象に、自記式質問紙調査及び補完するための面接調査により飲酒量推移及びその関連因子について検討した。糖尿病の診断時と調査時の間(6か月以上)に、56例が50%以上飲酒量を減らしていた。診断時に200g/週以上飲酒していた65名を、調査時に飲酒量減少を示した41名と示さなかった24名に分けて分析した結果、飲酒量減少に有意に関連した因子は、糖尿病性網膜症の自覚、診断時における急性症状で、年齢(45歳未満)も関連していた。飲酒量減少の理由に、医療者による説明、糖尿病性網膜症の進展が、高用量飲酒維持の理由として、症状がないことが挙げられた。以上より、飲酒の適切な管理のためには、患者の状態や疾病に対する自覚を支援するアプローチが重要であることが示唆された。
26	日本語	原浩平	介護予防・健康づくりに挑戦!生活習慣病予防の地域連携ネットワーク形成 やかげXプロジェクトから矢掛町健康増進大学へ	地域医療	2006	44	50-54	
96	日本語	菱輪眞澄	呼吸器疾患フォーラム たばこ対策	健康管理	2006	625	6-18	
147	日本語	田中平三	【食と生活習慣病】栄養・食生活と生活習慣病の予防	からの科学	2006	249	22-23	
172	日本語	木村達志, 菊池 佐二, 稲水博, 大成浄志	健康増進を目的とした至適運動条件の基礎的検討 血流量動性のサーカディアンリズムに着目して	日本へモレオロジー学会(2);37-42	2006	37-42	7-42	特に運動の場面において、どのような条件やタイミングで運動を行うことがより安全で効果的であるかを検討するため、その前段階として健康条件を含めたサーカディアンリズムと血液流動性との関係を検討した。内科的疾患および喫煙、飲酒習慣のない男性1例を対象とした。全血通過時間は、9時の測定値が最高値を示し、11時以降は定常状態を示した。ヘマトクリットは、全血通過時間と同様な傾向を示した。ADPを添加した試料通過時間は、測定開始より著明な下降を示した。朝食前9時の測定値は、全血通過時間へマトクリットおよびADP添加試料通過時間は最高値を示し、血流量動性が他の時間に比して良好状態にないことが確認された。早朝朝食前の運動実施は避けるべきであることが示唆された。
22	日本語	楊鴻生	【高齢者骨疾患 骨粗鬆症を中心】骨粗鬆症 概論 易骨折性とリスクファクター対策	日本臨床	2006	64	1605-1609	

No.	Language	Authors	Title	Journal	Year	Volume	Pages	Abstract
112	日本語	谷口威夫	【歯周病の検査とメンテナンス】歯周病の検査をメンテナンスにどう反映させるか	歯科医療	2004	18	34-42	
131	日本語	西村英紀	【生活習慣病の生活指導メタボリックシンドローム以外の疾病】生活指導の実際 歯周病	クリニカルプラクティス	2006	25	649-651	
137	日本語	鶴田来美, 野尻雅美, 宮崎有紀子, 中野正孝	地域住民の保健行動と行動特性に関する研究	日本健康医学会雑誌	2000	9	38-44	
165	日本語	小堀裕一, 大久保信司, 山科章	【心筋梗塞と脳梗塞の対比update】心筋梗塞の再発予防	循環器科	2006	59	466-472	
193	日本語	太田博明	【スポーツ医学の新展開】運動の介入による骨粗鬆症および骨折の予防	医学のあゆみ	2006	217	1041-1046	骨粗鬆症は明らかな生活習慣病であるので、運動による効果があるはずである。この効果にも骨量減少抑制効果、骨量増加効果、骨折防止効果とある。さらにライフスタイルのもうひとつの重要事項であるカルシウムとビタミンDなどの栄養摂取の充足の有無によっても運動効果がkey pointとなる。また、運動効果の判定には対象者の骨代謝動態が、女性のライフスタイルのなかでも若年女性における運動の効果はとくに大である。また更年期以降、閉経の周辺期は年間3%近い腰椎骨量の低下がある。この時期において運動による骨量の低下抑制は可能であるが、増加を望むことは難しいものと思われる。運動の骨量増加効果は1%前後であるので、厳密な研究法でないとは骨性因子と骨外因子とに分けて考える必要がある。運動の励行は、骨折防止に有効であると考えるのが妥当であろう(著者抄録)
197	日本語	丸山仁司	【生活習慣病予防と理学療法戦略】生活習慣病予防に対する日本理学療法士協会の今後の取り組み方	理学療法	2006	23	788-791	
198	日本語	小林寛道	【生活習慣病予防と理学療法戦略】生活習慣病予防への取り組みのあり方を考える	理学療法	2006	23	782-787	

## 生價全体

NO.	Langauj	Authors	Title	Journal	Year	Vol/J	Pages	Abstract
10	日本語	永山悦子	ライフサイエンスウォッチング 内臓脂肪型肥満が危ない	からの科学	2006	250	96-97	
13	英語	SaitoKan, IshizakaNobukazu, NagaiRyozo	どのようにして,何故,メタボリック クシンドロームを診断するの か?(How and Why Do We Diagnose Metabolic Syndrome?)	人間ドック	2006	20	1-5	
19	日本語	松澤佑次	【病態に即した管理・治療戦略 Up dateな糖尿病管理・治療へ のナビゲーション】生活習慣 病と脂肪細胞	糖尿病UP-DATE	2006			
53	日本語	徳永勝人	【メタボリックシンドロームと運 動】メタボリックシンドローム のメカニズム	体育の科学	2006	56	508-512	
74	日本語	狭間研至	浪花のあきんどクーター・狭間研 至の「健康診断徹底活用講 座」生活習慣病のパラメー ター(2)	PharmaNext	2006	31	44-47	
75	日本語	小林篤子, 加藤公 則, 高橋克美, 小林 隆司, 田辺直仁, 相 澤義房	人間ドックにおける脈波伝播 速度の経年変化についての検 討	人間ドック	2006	21	63-68	平成15年4月より脈波伝播速度(PWV)を人間ドックのオプション検査としてとりいれ測定を開始した今回,平成16年度に継続的に検査を受けた受診者のPWVデータに注目し,その経年変化と他の因子の変化について検討した.2回連続でPWV検査を受け,内科的治療を受けていない1170例を対象としたPWVが低下した群を改善群,上昇した群を悪化群として定義した.改善群は555例で,体重,BMI,体脂肪率,血圧,総コレステロールの改善を伴った.PWV悪化に寄与する独立した因子は,女性,年齢,体脂肪率の上昇,血圧の上昇,空腹時血糖の増加であった.PWVは動脈硬化の程度を数値化し,肥満の改善に伴ってその数値が改善する事より,人間ドック受診者に対して生活指導をする際に有効な指標であることが示唆された
79	日本語	永井裕子	私のまちづくり 健康づくりの 主役はやっぱり住民! 三重県 志摩市の健康づくり活動	保健師ジャーナル	2006	62	554-557	
80	日本語	高橋伸悟	【市町村合併,その後 新自治 体の挑戦】合併後も力強く推 進する住民と行政のエンパワ メント「清書 このままで,えま 会」の取り組み	保健師ジャーナル	2006	62	542-545	



No.	Langua	Authors	Title	Journal	Year	Volu	Pages	Abstract
83	英語	SatoHiroki, Nishino Tesuo, TomitaKazuo, TsumsuiHiroyuki	空腹時トリグリセリドは中高年の日本人男性の冠動脈疾患の重要な危険因子である 10年間のコホート研究結果 (Fasting Triglyceride is a Significant Risk Factor for Coronary Artery Disease in Middle-Aged Japanese Men: Results From a 10-Year Cohort Study)	Circulation Journal	2006	70	227-231	冠動脈疾患(CAD)発症における危険因子を同定するため,1995~2005年迄の6966名の日本人中高年男性(平均46.6歳)の追跡コホート研究を行った.追跡期間中,111名の被験者がCADに罹患していた.CADの独立した危険因子を同定するために,Coxの比例ハザードモデルを用い,年齢,BMI,喫煙,飲酒,睡眠時間,収縮期血圧,尿酸,総コレステロール,HDLコレステロール,空腹時血糖,グルコース及びトリグリセリド(TG)などの変動について調整を行った.その結果,空腹時TGはCADの独立した危険因子であった.TGのCADに対する調整危険率は3.07であった.更に,血清TGレベルが78mg/dl以上は有意なCADの危険因子であった.以上から,中高年の日本人男性におけるCADの重要な危険因子は空腹時TGである
132	日本語	久保田進	メタボリックシンドローム(メッツ)日本人の代謝は歪んでいる(1)	放射線科学	2006	49	205-211	
134	日本語	門脇孝	糖尿病の新しい治療薬 メタボリックシンドロームと糖尿病	東京都医師会雑誌	2006	59	577-586	
161	日本語	佐藤晴美	【正しく理解しよう! メタボリックシンドローム】 もっと知りたい!メタボリックシンドローム最新トピックス	コミュニケア	2006			
175	日本語	加藤典子	【生活習慣病対策の展望】 これからの保健指導 標準的な保健指導プログラム(原案)をもとに	地域保健	2006	37	20-29	
176	日本語	中野滋文	【生活習慣病対策の展望】 今後の生活習慣病対策における新しい健診・保健指導	地域保健	2006	37	12-19	
189	日本語	松下由実,戸邊之,原一雄,門脇孝	【メタボリックシンドロームと腎疾患・糖尿病腎症】 メタボリックシンドロームと腎疾患 メタボリックシンドロームの基本的な考え方 疫学的分子メカニズムにいたるまで	Mebio	2006	23	10-23	
199	日本語	佐藤徳太郎	【生活習慣病予防と理学療法戦略】 生活習慣病とその予防の意義	理学療法	2006	23	775-781	

No.	ID	Langua	Authors	Title	Journal	Year	Volur	Pages	Abstract
8	2007007478	日本語	小久保豊	肺癌における未病	未病と	2006	15	41-49	
9	2007007449	英語	SonmezAlper, KisaUcler, UckayaGokhan, EyiletanTayfun, KinapCan, YilmazM,Ilker, DogruTeoman, TuranMustafa, KocariHakki	冠動脈疾患患者の無症候血族者では末梢T細胞活性が高値である (Asymptomatic kindred of patients with coronary events have increased peripheral T-cell activities)	Heart al	2006	21	242-246	健康男性50例(平均22±2.4歳)から単離したTリンパ球の活性を、phytohemagglutininに対する増殖反応により評価し、末梢T細胞活性性と血清コレステロール値、喫煙、心血管疾患の家族歴との関連を検討した。その結果、冠動脈疾患の家族歴がある17例のTリンパ球活性は、家族歴がない33例より有意に高値であり、家族歴がある群の総コレステロール値および低濃度リポ蛋白コレステロール値は、Tリンパ球活性と有意に正相関していた。喫煙者40例と非喫煙者20例ではTリンパ球活性に有意差は認めなかった。冠動脈疾患患者の親族において、末梢T細胞活性性は増加傾向にあることが示唆された。
11	2007007114	日本語	梶尾裕	【臨床栄養のあらたな潮流を求めて】 臨床栄養の観点からみた診療ガイドライン 高血圧診療ガイドライン	医学の	2006	218	431-436	高血圧症の治療の目的は、高血圧によって起こる臓器障害や動脈硬化などの合併症対策である。『高血圧治療ガイドライン2004』(JSH2004)は日本人特有の生活習慣と心血管病に合わせた標準的治療をめざしている。高血圧の治療はリスクの層別化に応じた治療計画に基づく。治療には生活習慣の修正と降圧薬治療があり、生活習慣の修正を徹底させながら降圧目標達成のために必要に応じて降圧薬治療を開始する。(著者抄録)
16	2007002051	英語	SakaguchiShigeko, YokokawaYoshiharu, HouJun, ZhangXiu-Lan, LiXiang-Ping, LiShao-Sen, LiXiao-Xian, ZhuDe-Chen, KamijimaMichihiro, YamanoshitaOsamu, NakajimaTamie	中国の食道癌の低および高発生率地域における食道癌患者の環境曝露とp53突然変異(Environmental Exposure and p53 Mutations in Esophageal Cancer Patients in Areas of Low and High Incidence of Esophageal Cancer in China)	The Tol	2005	207	313-324	食道癌は世界で第6番目に発生率が高い癌であり、環境因子(食事、栄養、喫煙、飲酒等)に加え、遺伝因子(p53突然変異)がその発生に関与する。食道癌の環境危険因子と腫瘍組織中のp53突然変異の両因子間の関連について、中国・河北省の高発生地域居住患者77名と低発生地域居住患者50名を対象に調査した。これらの患者のうち各頻度の地域差のないp53突然変異が約50%にみられた。高発生地域居住患者においてみられる主な突然変異型はG:C>A:T転位突然変異であった(患者19名、50%)。一方低発生地域ではG:C>A:T転位および挿入が同等頻度でみられた(患者8名、33.3%)。環境因子との関連に関しては、低発生地域での辛い食品の日常摂取患者と生の井戸水を使用している患者において高頻度でp53突然変異が発生していた。ロジスティック回帰分析では低および高発生地域における食物摂取とp53突然変異間に関連はみられなかった。以上より、高頻度の辛い食物摂取と生の井戸水使用が中国におけるp53突然変異経路(食道癌)の年次身体検査の横断的結果から、沖縄におけるメタボリック・シンドローム(MS)の有病率について検討した。インスリン抵抗性の指標としてホメオスタシスモデル評価指数(HOMA-R)についても算出し、HOMA-RとMSとの関係を検討した。当病院で2003年5月～2004年3月に年1回の身体検査を受けた男性3839名(平均49.2歳)および女性3146名(平均50.0歳)の計6985名(30～79歳)について検討した。MSの診断は全米コレステロール教育プログラム成人治療委員会(Adult Treatment Panel III:ATP III)の基準に基づいた。腹囲については日本肥満学会の診断基準に従って評価した。MS有病率は男女それぞれ30.2%、10.3%であった。平均HOMA-RはATP III危険因子数増加とともに有意に上昇した。性、年齢、およびHOMA-Rの独立変数を用いたロジスティック回帰分析によるMSのオッズ比は男性に対して3.6、10歳増加に対して1.4、1.0を超えるHOMA-R上昇に対して2.0
17	2007001986	英語	TanakaHideaki, ShimabukuroTakeshi, ShimabukuroMichio	沖縄の男性にみられるメタボリック・シンドロームの高有病率(High Prevalence of Metabolic Syndrome among Men in Okinawa)	Journal	2005	12	284-288	

No.	ID	Langua	Authors	Title	Journal	Year	Volur	Pages	Abstract
18	2007001905	英語	DramanSamsul, IsmailShaiful Bahari, MerchantMohd Raza, YusofHarmy Mohd, HusinTengku Arif Raja, SinghSuran, SinghJasmit	マレーシアケランタン州のコタバル病院における統合失調症患者の反復入院の危険因子に関する研究(A Study on Risk Factors of Repeated Admissions among Patients with Schizophrenia in Hospital Kota Bharu, Kelantan, Malaysia)	Internat	2005	12	185-192	コタバル病院の統合失調症患者において前回の入院から6か月未満で再入院に至る危険因子を特定した。2002年10月1日～2003年3月31日に統合失調症のDSM-IV基準を満たしたコタバル病院の外来患者120名および入院患者120名に対し、確認アンケートを用いて面接した。アンケートには患者の社会人口学的データ、コンブライアンス、病識、家族のサポートおよび生活上の出来事に関する質問事項が含まれた。多重ロジスティック回帰により、若年齢、過去の入院回数、良好なコンブライアンス、病識不足、部分病識、フォローアップの重要性および家族によるフォローアップの惹起は反復入院の有意な危険因子であることが示された。結婚歴、収入、教育、病院までの距離および生活の出来事など他の変数に有意な関連性はなかった。結論として、年齢、過去の入院回数、低コンブライアンス、病識不足および家族支援の不足は統合失調症患者における反復入院の重要な地方都市と首都圏の小学2年生計164名を対象に、口腔診査と保護者への質問紙調査を行い、標題の関係について検討した。就学前に仕上げ磨き習慣の有った群は無かった群に比べてdfとdf歯率が有意に低値であった。歯磨き習慣と齧り癖の有無について2項ロジスティック回帰分析を行ったところ、乳歯齧り癖に有意性が認められた。生活環境と齧り癖の有無について2項ロジスティック回帰分析を行ったところ、永久歯齧り癖には有意性が認められた。生活環境と齧り癖の有無について2項ロジスティック回帰分析を行ったところ、永久歯齧り癖には有意性が認められた。乳歯齧り癖には有意性が認められた。
20	2006321718	日本語	横塚浩一, 田中とも子, 白瀬敏臣, 八重垣健	小学校2年生の口腔状況と生活習慣および生活環境の関係 効果的なヘルスプロモーションのための基礎的研究	日本歯科	2006	41	100-110	小学生・中学生が自分自身の生活習慣をセルフチェックすることができる。その変化を知ることができる小学生・中学生版「お口の健康づくり得点」を学校歯科健診のデータと生活習慣についての質問紙調査を基にして作成した。得点を作成するためにロジスティック回帰分析を用いて、歯垢、歯肉、歯肉の健康状態に関連する口腔内の自覚症状、生活習慣のそれぞれの影響の大きさを求めた。セルフチェック票を小学校低学年、高学年、中学校別に作成した。歯の健康の指標として用いた。歯垢の状況、歯肉の健康、う蝕経験は比較的高い割合で児童生徒が経験し、理解しやすい項目と考えとりあげた。セルフチェック票はすでに対象地区動脈硬化の進展にウイルスや細菌感染の関与が以前から考えられていた。Helicobacter pylori感染が動脈硬化に影響し生活習慣病と関連しているという報告は、冠動脈疾患と脳血管疾患について散見される。H.pylori感染は糖尿病、高脂血症、高血圧、喫煙などの既知の冠動脈疾患の危険因子とは独立した危険因子である。CagA陽性株はCagA陰性株に比べて有意に冠動脈疾患および脳血管疾患の発症に影響している。H.pylori感染は高齢者よりも若年者において強く冠動脈疾患に関与している。わが国のデータでは冠動脈疾患の発症には糖尿病の影響が非常に強く、H.pylori感染は糖尿病や喫煙歴のない冠動脈疾患患者に強く関与している。糖尿病の増加が問題化しているわが国ではH.pylori感染は生活習慣病のさらなる増悪因子となっている可能性がある(著者抄録)
21	2006320493	日本語	各務和宏, 加藤考治, 岩崎隆弘, 中島伸広, 伊藤律子, 秦和歌子, 水野寛代子, 森田一三, 中垣晴男	児童・生使用菌の生活習慣セルフチェック票「お口の健康づくり得点」の作成	学校保健	2006	48	245-259	小学生・中学生が自分自身の生活習慣をセルフチェックすることができる。その変化を知ることができる小学生・中学生版「お口の健康づくり得点」を学校歯科健診のデータと生活習慣についての質問紙調査を基にして作成した。得点を作成するためにロジスティック回帰分析を用いて、歯垢、歯肉、歯肉の健康状態に関連する口腔内の自覚症状、生活習慣のそれぞれの影響の大きさを求めた。セルフチェック票を小学校低学年、高学年、中学校別に作成した。歯の健康の指標として用いた。歯垢の状況、歯肉の健康、う蝕経験は比較的高い割合で児童生徒が経験し、理解しやすい項目と考えとりあげた。セルフチェック票はすでに対象地区動脈硬化の進展にウイルスや細菌感染の関与が以前から考えられていた。Helicobacter pylori感染が動脈硬化に影響し生活習慣病と関連しているという報告は、冠動脈疾患と脳血管疾患について散見される。H.pylori感染は糖尿病、高脂血症、高血圧、喫煙などの既知の冠動脈疾患の危険因子とは独立した危険因子である。CagA陽性株はCagA陰性株に比べて有意に冠動脈疾患および脳血管疾患の発症に影響している。H.pylori感染は高齢者よりも若年者において強く冠動脈疾患に関与している。わが国のデータでは冠動脈疾患の発症には糖尿病の影響が非常に強く、H.pylori感染は糖尿病や喫煙歴のない冠動脈疾患患者に強く関与している。糖尿病の増加が問題化しているわが国ではH.pylori感染は生活習慣病のさらなる増悪因子となっている可能性がある(著者抄録)
23	2006319971	日本語	大澤博之	【ヘリコバクター・ピロリ菌と種々の病気の関わり】生活習慣病	Medical	2006	32	450-453	肺炎クマリジニアや歯周病原菌などの感染が動脈硬化症の進展に関与すること
24	2006319153	日本語	神楚奈美, 中村健, 田島文博	【アダブテッド・スポーツ その人に合ったスポーツ】車いすスポーツの	保健の	2006	48	575-579	肺炎クマリジニアや歯周病原菌などの感染が動脈硬化症の進展に関与すること
27	2006316962	日本語	大口純人, 岸本寿男	【虚血性心疾患のリスクファクター】基礎病態である動脈硬化の危険因子 感染症・喫煙・ホモシステニン	The Lipi	2006	17	229-235	肺炎クマリジニアや歯周病原菌などの感染が動脈硬化症の進展に関与すること

No.	ID	Langua	Authors	Title	Journal	Year	Volun	Pages	Abstract
34	2006315020	英語	SasakiJun, KitaToru, MabuchiHiroshi, MatsuzakiMasunori, MatsuzawaYuji, NakayaNoriaki, OkikawaShinichi, SaitoYasushi, ShimamotoKazuaki, KonoSuminori, ItakuraHiroshige, the J-LIT Study Group	低用量シンバスタチンで治療中の日本人高コレステロール血症者における危険因子に関連する冠動脈疾患の性差(Gender Difference in Coronary Events in Relation to Risk Factors in Japanese Hypercholesterolemic Patients Treated With Low-Dose Simvastatin)	Circulat	2006	70	810-814	6年間の観察研究, Japan Lipid Intervention Trial(J-LIT)の集団, 男12,575例と女27,013例についての解析を行った. 低用量シンバスタチン治療により血清低比重リポ蛋白コレステロール(LDL-C)は男女とも27%低下, 血清高比重リポ蛋白コレステロール(HDL-C)は男で5%, 女で4%上昇した. 冠動脈事故発症は女の方が男よりも有意に低かった(1000人・年当り女0.64対男1.57, p<0.001). LDL-C濃度上昇に伴う冠動脈事故危険の増加, HDL-C濃度上昇に伴う冠動脈事故危険の減少は男女間に差がなかった. 糖尿病合併による冠動脈事故危険の増加は女の方が男よりも有意に大であった(相対的危険は女3.07, 男1.58)
36	2006312668	英語	ShiraishiJun, KohnoYoshio, YamaguchiShinichiro, AriharaMasayasu, HadaseMitsuyoshi, HyogoMasayuki, YagiTakakazu, ShimaTakatomo, SawadaTakahisa, TatsumiTetsuya, AzumaAkihiro, MatsubaraHiroaki	若年成人日本人急性心筋梗塞患者の中期予後(Medium-Term Prognosis of Young Japanese Adults Having Acute Myocardial Infarction)	Circulat	2006	70	518-524	2001~2003年に登録された日本人急性心筋梗塞患者1458例中, 40歳未満の若年群21例と60~70歳の190例の中期予後を比較検討した. 若年群は全例男性であり, 喫煙頻度, BMIは高齢群より高かった. 緊急冠動脈造影上, 若年群では1血管疾患の頻度が高く, 冠動脈左回旋枝のculprit病変の頻度は低かった. 経皮的冠動脈手術を施行し, 術後の再灌流は両群間で有意差はなかったが, 最大 creatine kinase値は若年群の方が有意に高値であった. 追跡期間中央値は, 若年群2.42年, 高齢群2.37群であった. 生存率は, 若年群95%, 高齢群92%. 無発症生存率は各々57%, 41%であり, 主な有害心疾患発症(MACE)頻度は両群間で有意差は認めなかった. MACEの予測因子は, 若年群では多血管疾患の存在, 高齢群では多血管疾患の存在, 心筋梗塞の経験あり, 長期入院であった. 若年AMIは患者の中期予後は高齢患者と同等であることが示唆された
38	2006312565	日本語	藤原江美子, 齋藤仁子	【「ライフスキル」は健康教育に使える】実践事例 子どもの生きる力を育む健康教育を推進するために	保健師	2006	62	358-365	
40	2006307555	英語	MiwaKunihisa, KishimotoChiharu, NakamuraHajime, MakitaToshinori, IshiiKatsuhisa, OkudaNobuaki, YodoiJunji, SasayamaShigetake	主要危険因子を有する患者におけるチオレドキシンおよび $\alpha$ -トコフェロールの血清濃度(Serum Thioredoxin and $\alpha$ -Tocopherol Concentrations in Patients With Major Risk Factors)	Circulat	2005	69	291-294	酸化ストレスは様々な冠危険因子を有する患者において増加すると考えられており, 酸化還元タンパク質であるチオレドキシン(TRX)も含まれる. 酸化ストレス増加の有無を決定するため, TRXおよび $\alpha$ -トコフェロール(ビタミンE)両方の血清濃度を冠危険因子を有さない対照12名(CONTROL), 喫煙者6名(SMOKING), 高血圧患者19名(HT), 高コレステロール症患者7名(HC)および複数の危険因子を有する14名(MULTIPLE)において決定した. 糖尿病患者は除外した. 血清TRX濃度はCONTROLに比べてSMOKING, HT, HCおよびMULTIPLE群で有意に高かった. 血清 $\alpha$ -トコフェロール濃度はCONTROL, SMOKING, HTおよびHC群間に有意差はなかったが, MULTIPLE群において有意に低かった. 本結果から, SMOKING, HT, HCおよびMULTIPLE群において酸化ストレスが増加しており, さらに複数の危険因子により慢性酸化ストレスに対する防御機能が低下, 疲弊するアルツハイマー病(AD)と臨床診断を受けた患者37例においてAD発現危険因子を確立し, ADとストレスの多いライフイベントとの間に関連性があるかをパーキンソン病(PD)患者37例とのレトロスペクティブ比較対照試験により調査した. 患者との構造的直接インタビューもしくはは代理人の回答を用い, 精神的ショックや負荷を誘発した可能性があるライフイベントおよび頭部外傷や慢性頭痛の既往歴に関する情報を収集した. AD患者31例(83.8%)は, 発現前5年以内に様々な精神的苦痛を経験しており, PD患者ではわずか8例(21.6%)が同様であった. ADとストレスの多いライフイベントとの間には有意な相関性がみられたが, ADと頭部外傷や慢性頭痛との間にはみられなかった. ストレスの多いライフイベントはAD発症の原因と考えられる一方, PD発症との関連性はないと思われる
41	2006305340	英語	中澤秀嘉, 松本光弘, 松川則之, 牧義泰, 佐藤順子, 山脇健盛, 上田龍三, 小鹿幸生	アルツハイマー病発現の危険因子としてのストレスの多いライフイベントパーキンソン病との比較(STRESSFUL LIFE EVENTS AS RISK FACTORS FOR DEVELOPMENT OF ALZHEIMER'S DISEASE: COMPARISON WITH PARKINSON'S DISEASE)	Nagoya	2005	47	133-141	